

研究分野	増養殖技術	部名	磯根資源部
研究課題名	尻屋磯根資源調査		
予算区分	公共		
試験研究実施年度・研究期間	S. 57 ~		
担当	長根幸人		
協力・分担関係	尻屋漁業協同組合、尻屋漁業研究会、下北地方農林水産事務所むつ水産事務所		

〈目的〉

尻屋地先の磯根資源の状況を把握し、造成漁場を含む地先漁場の管理に資する。

〈試験研究方法〉

2005年6月7日に、太平洋に面する尻屋地先に15調査線を設け(図1)、各々の水深2.5m、5m、10m、15m、20mにある計72調査点に潜水し、海藻を50cmまたは1m四方の枠で1枠分、底棲動物を1m四方2枠分採取し、種ごとに個体数と湿重量を求めた。

調査線1、4、7、9、13、14から採取されたキタムラサキウニのうち、漁獲サイズにある計107個については、生殖腺重量を測定し、身入りを求めた。

〈結果の概要・要約〉

1. 2年目マコンブ

2年目マコンブは、水深5m地点から0.07本/m²が採取されたのみであった。生育密度は平均0.01本/m²で、前年同月に行った調査結果の0.3%に相当した。このことから、2005年漁期のコンブ漁獲量は、前年に比べ低減すると考えられた。

2. 1年目マコンブ

1年目マコンブは、表1のとおり、前年調査結果の6.1倍に相当する平均16.4本/m²生育した。水深2.5m、5mでは各々44.3、37.0本/m²で、他の水深帯の0.1-5.5本に比べ比較的高密度であった。これらから、2006年の2年目マコンブの漁獲量は、本年より増えると考えられた。

3. エゾアワビ

省略

4. キタムラサキウニ

キタムラサキウニは、調査点の86.1%相当する62地点から採取され、生息密度と現存量がそれぞれ平均2.3個体/m²、311g/m²であった。調査点の85.1%から平均2.26個体/m²、311.2g/m²の生息が確認され、前年に比べ密度が4.3%増加、現存量が5.3%増加した。1995-2005年までの10年間の平均密度(2.17個体/m²、333g/m²)には大きな変化がなかった。佐井村地先では、キタムラサキウニが100g/m²以上の密度で生息する場にマコンブが発生・生育しにくくなることが知られている。本調査場所では、キタムラサキウニの食害による磯焼けの発生・持続が懸念されるため、その生息状況を注視すると共に、漁獲等により適切な密度管理を考慮する必要があると考えた。

キタムラサキウニの身入り(生殖腺指数)は6調査線上の21地点を調べた。その結果、水深2.5、5、

10、15、20mで、各々平均 20.0、19.1、12.7、6.1、6.4 であった。水深2.5mと5mでは、2002-2004年の3年間の平均の各々21.1、20.2 に比べ 94.8%とやや低い値となったが、水深 10、15、20m のものでは、2002-2004年の3年間の平均の各々17.3、11.6、8.7に比べ52.6-73.8%の低い値となった。

〈主要成果の具体的なデータ〉

表1 1年目マコブの水深別生育密度

水深	2005年	2004年
2.5 m	44.3 本/m ²	1.9 本/m ²
5 m	37.0 本/m ²	2.4 本/m ²
10 m	5.5 本/m ²	8.0 本/m ²
15 m	0.9 本/m ²	2.0 本/m ²
20 m	0.1 本/m ²	0.0 本/m ²
平均	16.4 本/m ²	2.7 本/m ²

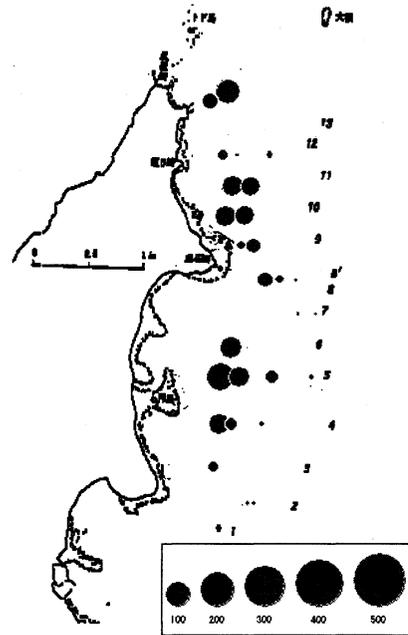


図1 2005年6月の尻屋沿岸における1年目マコブの生育分布(本/m²) (図中の数字は調査線の番号を表す)

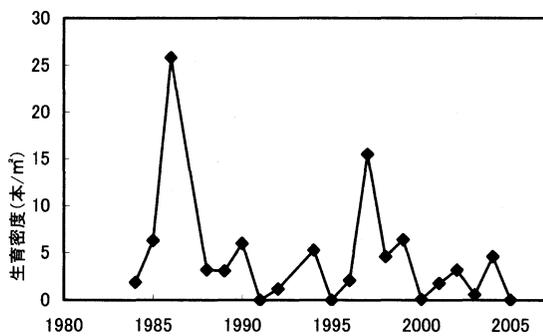


図2 1994年から2005年までの尻屋地先の2年目マコブの生育密度変化

〈次年度の具体的計画〉

次年度においても、6月に同様の調査を行う予定である。

〈結果の発表・活用状況等〉

調査当日に尻屋漁業協同組合漁業研究会に対し調査結果を説明した。また、漁業協同組合に対しては調査翌週に報告し、アワビ、ウニおよびマコブの生産計画及び資源管理に反映させた。